

A-124 慣行食と健康の生態学的研究(オ1報)

—慣行食の変質が住民の健康におよぼす影響について—

岩手大教育 ○鷹嘴ヲル 及川桂子 赤沢典子

目的 現代栄養学の克服すべき問題点をいくつかあげてみると、従来の栄養素中心の分析的な方法に加えて、生活構造全般と関連づけるような考え方や、慣行食とその地域住民の健康状態とのかかわりを、総合的にとらえていく考え方が必要ではないだろうか。さらに風土と歴史との制約の下で住民たちが作りあげてきた慣行食の変質の背後にある問題も併せて検討もなければならぬ。そうした視眼にたつて、社会的・自然的生態系のなかに生活する人間に最適な栄養とは何か…。また生涯栄養の立場から発育に良好な栄養条件と寿命あるいは成人病予防に良好な栄養条件とは何かを、とらえるためにこのような研究を試みた。

方法 それぞれの地域の慣行食は昭和29年と昭和49年に調査を行なつて、20年間の変化とその要因について比較検討した。健康調査は発育期の栄養の良否の指標に乳児死亡率の变化を、成人期および老人期の栄養の指標に成人病死亡率の变化を考慮にした。それらの衛生統計資料は岩手県衛生年報より算出した。

結果 以上の慣行食の史的調査から、平常食の面では混食率の低下、緑黄色野菜、海藻類、いも類の減少が認められた。一方摂取量の増加したのは動物性食品、パン類、砂糖、インスタント食品があげられた。次に変質の背後にある問題として、農業生産のあり方、婦人労働のあり方、住民の正しい食物観のあり方の再検討を痛感した。さらに健康との相関では、良い面として乳児死亡率の減少と体位の向上があげられるが、食生活の近代化が成人病多発の要因となつていることが確認された。